

平成 22 年 5 月 12 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520490  
 研究課題名（和文） アジア諸国の教科書分析に基づくドイツ語教育のカリキュラムと到達度  
 テストの開発研究  
 研究課題名（英文） The Study of Curriculums and Achievement Tests for German Language:  
 Based on an Analysis of German Textbooks in Asia  
 研究代表者  
 吉満 たか子 （YOSHIMITSU TAKAKO）  
 広島大学・外国語教育研究センター・准教授  
 研究者番号：20403511

研究成果の概要（和文）：本研究では、初年次に日韓のドイツ語教科書を語彙および導入される文法項目の点から比較分析を行い、翌年度には日韓のドイツ語学習者のプロフィールや学習方法について、アンケートおよびインタビューを実施し調査した。最終年度には、韓国の高等学校におけるドイツ語教育の実態を現地調査した。これらの調査・分析結果から、外国語教育および異文化理解教育において、韓国は日本に比べ大きくリードしており、成果を挙げていることが浮き彫りとなった。

研究成果の概要（英文）：In the first year of this study, the vocabulary items in Japanese and Korean German textbooks were quantitatively compared. In the second year, a survey was conducted during a summer course at the University of Hamburg with the intention of gaining insights into the profiles, motivation, and difficulties which Japanese and Koreans possess when learning both German and language-learning strategies. In order to investigate the effects of Korean high school German lessons, in the last year of this study German classes in three high school in Seoul, Korea were visited by this researcher. It was founded that Japan is far behind Korea with respect to promoting cross-cultural understanding.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ドイツ語教育・教科書分析・カリキュラム開発

### 1. 研究開始当初の背景

広島大学では毎年10名前後の学生が、ハンブルク大学で開催されるサマースクールに参加しドイツ語を学んでいる。このコースには韓国および台湾の学生も参加しているが、いずれの参加者も日本人参加者と比べ、総じて高いドイツ語運用能力を有している。日本・韓国・台湾、いずれもヨーロッパとは異なる文化的背景を持ち、それぞれの言語は、同程度にドイツ語からは「離れた」言語である。にもかかわらず、韓国や台湾の大学生がドイツ語学習という点で、日本の大学生に比べ、かなりの差を付けて上のレベルにいることの原因はどこにあるのかという疑問が本研究の出発点である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、文化的背景が似通っている東アジア諸国におけるドイツ語教育の実情と大学生のドイツ語学習者の学習歴や学習方法を調査し、日本の大学生がある一定期間ドイツ語を学習した場合に、韓国や台湾など東アジア諸国の大学生とドイツ語によるコミュニケーションを図ることのできる言語運用能力を身につけるためにはどのようなカリキュラムが必要かを明らかにし、到達度を測るためのテストを開発することである。

### 3. 研究の方法

本研究は、主に以下に挙げる3つの方法で行われた。

- 1) 韓国および日本で発行されているドイツ語の教科書の語彙数と導入されている文法項目を比較する。
- 2) ハンブルク大学サマースクールの韓国人および日本人参加者のうち、比較的レベルの高いクラスから被験者を募り、アンケートとインタビューを実施し、プロフィールや学習方法などを調査する。
- 3) 韓国の高等学校において授業見学を行い、高等学校におけるドイツ語教育の実情を観察し、担当教員からも話を聞く。

### 4. 研究成果

初年度は、日韓ドイツ語教科書に登場する語彙の量的比較を行った。調査対象とした教科書は次のとおりである。

《韓国の教科書》

『Alles Klar! Deutsch für Studenten』  
(2000)

著者：ドイツ語教材編集委員会 (チェ・ウンギョ/イ・ミネン/イ・ウォンギョン)

発行：延世大学出版部

『Deutsch heute』(2003)

編者：リュ・ジョンヨン

発行：文藝林

『Fröhliches Deutsch』(2000)

著者：キム・ジュヨン/キム・ミラン/ジョン・ソウン/シン・ヘヤン/チャン・ヨンウン/ク・ミンチョル/  
E.J. Jungk

発行：淑明女子大学出版局

(Sookmyung-Frauen-Universität Verlag)

『Lebendiges Deutsch』(2001)

著者：イム・ウヨン/カン・ビョンチャン  
キム・ヘセン/パク・ジングォン  
ペク・イノク/イ・ワンホ

発行：文藝林

《日本の教科書》

『Abfahrt スキットで学ぶドイツ語』(2007)

著者：飯田道子/江口直光

発行：三修社

『Ein Sommer in Hamburg ハンブルクの夏一初級ドイツ語総合教材』(2005)

著者：岩崎克己/田中雅敏/吉田光演

発行：郁文堂

『Farbkasten neu 1 自己表現のためのドイツ語1 (改訂版)』(2002)

著者：板山真由美/塩路ウルズラ

本河裕子/吉満たか子

発行：三修社

『Modelle neu 1 問題発見のドイツ語 (改訂版)』(2007)

著者：Andreas Riessland/藁谷郁美/木

村護郎クリストフ/平高史也

Marco Raindl/太田達也

発行：三修社

この比較においては、韓国の教科書で取り扱われる語彙数(異語数)は平均して日本の約2倍、文法項目についても日本の1.5倍であることが分かった。これらは教科書そのもの

のページ数からも明らかで、日本で発行されている初学者向けの教科書はいずれも100ページ未満であったが、韓国の教科書は平均208ページと倍以上のボリュームがあるものばかりであった。

調査の対象となった韓国の教科書はいずれも初学者向けの教科書で、例えば『Alles Klar!』の前書きには「大学の現実的な条件を考慮したもので、2学期間の授業で初級ドイツ語能力を習得するようにした…」とあり、1週間あたりの授業時間数は明記されていないものの、1冊の教科書を2学期間で終えることが前提になっている。調査対象となった日本の教科書は、広島大学では週2コマの授業で1年間(2学期)にわたり使用されている。したがって、数の上では韓国では日本の約2倍の語彙を1年間で学ぶことになる。また、学習する文法項目数も、韓国の教科書4冊の平均が41.75(項目)、日本の教科書4冊の平均は26.5(項目)となっている。韓国では日本の約1.5倍の文法項目を1冊の教科書で学ぶことになる。語彙数という観点からすれば、日本の大学で週2コマの授業を1年間履修した場合、韓国の高校における第1段階を終了した場合とほぼ同等のレベルにあるということになることが判明した

次年度にはハンブルク大学のサマースクールの参加者を対象にアンケートとインタビュー調査を行った。このサマースクールでは参加者のレベルに応じてクラス分けが行われており、ある一定の語学力を身に付けた学生を被験者とするため、8つあるレベルのうち上位4レベルのクラスにおいて協力を求めた。

アンケートでは、まず回答者のプロフィールを尋ねた。プロフィールにおいて大きく異なった点は、韓国人回答者14名中9名がすでに高校でドイツ語を学んでいることである。韓国人回答者が高校で学習した総時間数を算出すると、平均で約148時間となった。これに対し、日本人回答者で中学または高校でドイツ語を学んだ者は一人もいなかった。大学での専攻科目は、韓国人回答者の14名中12名がドイツ語であったが、日本人回答者のうちドイツ語を専攻しているのは15名中3名であった。そのため大学での1年あたりの学習時間は、韓国人回答者の平均が約176時間、日本人回答者の平均は95時間であった。

アンケートでは学習の動機や方法についても尋ねたが、その結果からは、例えば日本人は「単語がなかなか覚えられない」、「目で見たら理解できる内容でも、聞くとさっぱりわからない」といった問題を抱える傾向が強

く、韓国人の場合にはそうではないようである。また、韓国人回答者は「単語は何度も発音して覚え」、「テキストを読む際は音読を心がける」といった方法を用いて学習しているようであるが、日本人回答者はこのような方法をあまりとっていないようである。また、日本人回答者は「今のまま勉強してもドイツ語をマスターできるかどうか不安だ」と感じている傾向にあり、韓国人回答者ではこの傾向は見られなかった。これらのことから、学習時間もさることながら学習方法やモチベーションにおける差異が、コミュニケーション能力にも影響を及ぼしていることが窺えた。

インタビュー調査では、韓国人学生のほとんどが、高等学校においてドイツ語を学習した経験があり、インタビューのために開発した簡易口頭テストにおいても、高いコミュニケーション能力を示した。これに対し、日本人学生は例外なく大学に入学してから初めてドイツ語を学んでおり、簡易テストに対する回答においても、一語文でしか答えなかったり、聞かれたこと以上に答えようとする傾向はあまり見られなかった。

これらの差異には、高等学校におけるドイツ語学習経験が大きく影響していることは明らかであった。教科書の分析結果からは、韓国において日本の2倍近い語彙と文法項目が導入されていることが判明したが、実際にはどれくらいの期間でどのように学習されるのかは、アンケートとインタビューのみではわからなかった。そのため、本研究の最終年度には、韓国の高等学校において授業見学を行い、韓国におけるドイツ語教育の実情を視察した。韓国で視察を行ったのはソウル市内にある次の3つの高等学校である。

- ・ソウル師範大学附属高等学校
- ・ソウル藝術高等学校
- ・梨花女子外国語高等学校

ソウル師範大学附属高等学校は日本における普通課程の高等学校である。ソウル藝術高等学校は、芸術に特化した私立の高等学校で、美術科・音楽科・舞踊科の3つの学科があり、美術科と舞踊科ではフランス語が、音楽科ではドイツ語が必修科目として履修されていた。梨花女子外国語高等学校はミッション系の私立高校であるが、いわば外国語のエリート養成高校である。それぞれの高等学校における1週間あたりの授業時間数は次のとおりであった。

ソウル師範大学附属高等学校

	通常コース		インテンシブ・コース	
	通常授業	課外授業	通常授業	課外授業
1年次	3	0	4	6
2年次	3	0	(6)*	(3)*
3年次	0	0	(6)*	(3)*

\*2010年度以降の実施予定

ソウル芸術高等学校

	音楽科 (独語)	美術科 (仏語)	舞踊科 (仏語)
1年次	2	2	2
2年次	2	2	2
3年次	0	0	0

梨花女子外国語高等学校 (ドイツ語コース)

	第一外国語 (独語)	第二外国語 (英)	第三外国語 (仏/中)
1年次	8	14	0
2年次	16	16	4
3年次	18	8	2

3つの異なる高等学校では授業を見学し、また担当教員との懇談を行い、情報収集を行った。その結果、韓国の高等学校におけるドイツ語教育が、ある一定の成果を挙げている要因として次の4点が浮き彫りとなった。

1. 政府が人的資源の開発に力を注いでいること
2. 課外授業による時間数の確保
3. 外国語に特化した高等学校の設置
4. 質の高い教員の存在と学校の協力体制

他方、「学習者の動機づけ」や「クラスサイズ」、「他の教科との兼ね合い」など日本のドイツ語教育と同様の問題を抱えていることも明らかとなった。

しかしながら、英語以外の外国語を中等教育の段階で導入している韓国では、全国民と言っても過言ではない。これに対して日本では英語以外の外国語を学ぶのは大抵の場合が大学に入ってからであり、高等教育を受けない者は、英語以外の外国語を学ぶ機会がないというのが現状である。教育の分野で「異文化理解」や「グローバル化」がキーワードとなって久しいが、日本は韓国に大きな遅れを取っていることが示された。この知見は、日本における外国語教育の在り方、また、高等教育における教養教育を考える上においても大いに役立つものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 吉満たか子、韓国の高等学校におけるドイツ語教育の実情、広島大学外国語教育研究センター紀要、査読有、No. 13、2010
- ② 吉満たか子、日韓ドイツ語学習者の比較調査研究、広島外国語教育研究センター紀要、査読有、No. 12、2009、187-200
- ③ 吉満たか子、日韓ドイツ語教科書における語彙の量的比較、広島外国語教育研究センター紀要、査読有、No. 11、2008、153-166

[学会発表] (計3件)

- ① 吉満たか子、岩崎克己、アクセル・ハーティング、大学における学部横断的な中級ドイツ語教育の可能性、日本独文学会秋季研究発表会、2008年10月12日、岡山大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉満 たか子 (YOSHIMITSU TAKAKO)  
 広島大学・外国語教育研究センター・准教授  
 研究者番号：20405311

(2) 研究分担者

岩崎克己 (IWASAKI KATSUMI)  
 広島大学・外国語教育研究センター・准教授  
 研究者番号：70232650

ハーティング アクセル (Harting Axel)  
 広島大学・外国語教育研究センター・准教授  
 研究者番号：80403509

(3) 連携研究者

( )  
 研究者番号：